
リトルバスターズ after another story

evol@Rewrite

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ after another story

【Nコード】

N9602U

【作者名】

evol@Rewrite

【あらすじ】

修学旅行の後の、繰り返される理樹の記憶の物語。

第一話『記憶喪失』（前書き）

こんにちは、evol@Rewriteです。

前はギャグっぽい物語を書かせて頂きましたが。

今回は完全シリアス。

そして、リトルバスターズという物語に対しての思いと、僕が書きたいものを書こうと思っています。

なので、内容がごちゃごちゃ、意味がわからない、などの問題が発生する可能性がございますので、ご了承下さい。

「ヤッホー（＾Ｏ＾）ノシ
どうも久しぶり、また会えたね。
アシスタントの西園美鳥です。」

「今回は、あんまふざけないけど、その分厨二だから、「何この厨二ww」って笑ってあげてね」

・・・それでは

本編スタート！！

第一話『記憶喪失』

夢を見ていた。

その夢は、楽しくて、温かくて、まるで、今の生活の象徴のようで。

この夢が終わってしまったら、もう、取り戻せないんじゃないか。

そう、思えた。

・・・起きろよ。理樹。

その一言に起こされた。

夢の内容なんて、起きたらすぐ忘れてしまう。

『忘れる』んだ。

・・・なにも、思い出せない。
目の前の人間が誰なのか。
ここがどこであるか。

・・・自分が、どんな人間であるのかさえも。

「おい、理樹。起きてるならちゃんと起きてるって言えよ。」

目の前の大男は、僕の知り合いのようだ。

しかし、大きい。

「どうした？ 具合でも悪いのか？」

いきなり近づいてくる大男に僕は一瞬恐怖を覚えた。

「ほら、早く朝飯いくぞ」

大男が差し延べた手を、僕はつかむことができなかった。
いや、恐怖心がそれを許さなかった。

「本当にどうしたんだ？ 今日のお前、変だぞ。」

言葉が、出ない。

出てこない。

それもそうだ。

僕は忘れていたんだから。

瞬間、身に覚えのある感覚が身体中に走った。

不思議と『これ』の事は覚えていた。

ああ、そっか。

また始めからやり直した。

僕の意識は闇へと・・・落ちていく。

真っ白な部屋に僕はいた。

誰か話している。

五感がぼやけるなか、たった一言。

はつきりと聞こえた言葉があった。

『また・・・繰り返すのか。』

目が覚める。

見慣れない天井。

見慣れない布団。

真っ白な部屋の中に僕はいた。

「いまの夢は・・・何だったんだろう。」

たしか、僕はナルコレプシーで、眠りについた。

なぜかこの病気を知っていた。

自分の名前さえもわからずに。

「ここは・・・病院？」

一般的教養も覚えているようだ。

すぐに病室から出て、
自分の名前を確認する。

「直枝・・・理樹。」

「そうだ、お前は直枝理樹。思い出したか？」

突然聞こえた声に思わず後ずさる。

「ま、そんな簡単に戻るわけないか。よお理樹。俺は、お前の仲間
で、棗恭介ってんだ。」

「仲間・・・棗恭介・・・。」

「言いにくいだが、率直に言う。お前は記憶喪失しているんだ。」

そんなこと、もうわかってる。

「あなたは・・・僕を知ってるの？」

「フルネームを言ってしかも仲間面してるやつが知らないわけない
だろ。」

「・・・」

「ま、とりあえず帰るぞ。理樹。」

退院した僕は

知人・・・恭介に手を引かれ、ある学校に連れていかれた。

「ここは、俺達の学校だ。ちなみに俺はお前の一つ先輩だから。」

淡々と喋る恭介を見ると、なぜか悲しそうな顔をしていた。

「俺達の仲間はまだまだいるぞ。俺達はな、野球をやってたんだ。チーム名は、リトルバスターズってゆうんたぜ。」

「リトルバスターズ・・・野球？」

「なんだ？普通のことは覚えてるのに、野球、忘れちゃったのか？」

「・・・思い出せない。」

「そっか。まあ、一つずつ思い出せばいいさ。」

「・・・」

グラウンドに着く。

すると、何人かの生徒がなんらかのスポーツをやっていた。

しかし、見ていると、女の子のほうが数が多かった。

(どんなスポーツなんだ?)

すると、僕達に気づいた一番大きい赤いバンダナを巻いた男が近づいてきた。

「よお理樹。しんぱいしたぜ。で、大丈夫なのか？」

周りの人達も近づいてくる。

すると恭介が僕の前に立ち、

「皆に言わなくちゃいけないことがある。理樹は、記憶喪失なんだ。」

『え・・・ええー!?!』

「ま、マジかよ! え? 記憶喪失ってあれだろ? 記憶が、こう・・・なんてゆうか、『ボガン!!!』ってなるやつだろ!?!」

「紹介するぜ、まず、こいつが井ノ原真人。バカだ。」

「なにっΣ(∵) そうなのか!?! お茶の間はボーンなのか!?!」

「こいつが俺のかわいい妹、棗鈴だ。」

「わふっ! リキは爆発してしまったのですか!?! それとお茶の間も!?!」

「んで、こいつが能見クドリヤフカ。一見外国語ができるように見えるが、日本語のほうが上手い。」

「ふえええええ!？」

「こいつは神北小毬。今は固まっているが、大丈夫。ちゃんとした人間だ。」

「・・・理樹。俺の事、覚えているか？」

「こいつは宮沢謙吾。アホだが、根は真面目だ。おい謙吾、そんなに悲しむな。記憶はまた戻るさ。」

「恭介氏。少年はどこまで覚えていないんだ？」

「全部だ。思い出が全部。あと、野球の事も忘れちゃったらしい。他は覚えてるのにな。」

数秒間の沈黙が流れる。

「おっと、悪い悪い。こいつは来々谷唯湖。一見真面目に見えるが、かわいい女の子には目がない。お前も気をつけろ。」

「なんのことだね、恭介氏。私は可愛くて可憐な少女を愛でているだけだが。」

「その愛で方が問題だ。自重しろ。」

「まだメンバーは居るんだが・・・、みんないい奴らだから、仲良くしてやってくれよ。」

ちりん、と鈴の音を鳴らし、鈴が恭介の横に来て

「こいつはバカでアホでクズでマヌケの変態駄目兄貴だが、よろしくたのむ。」

「おいおい鈴。真性のロリコンだとゆうことを忘れてるぞ。」

猫の刺繍が入った袴を来ている謙吾が口を挟む。

「そうだった。こいつはしんせーのロリコンだったんだ。近寄るな変態。」

「・・・」

「やめろ理樹！そんな目で俺をみるな！冗談半分にきまってんだろ！？」

「うむ、半分は本気だな。」

「うわあああああ！！」

「あの、にげちゃいましたけど、ミスター恭介さん。」

「そっとしといてあげなよ。クーちゃん。」

「そうだぜ、お前が行ったら大変な事になる。」

「クドリヤフカ君は対ロリコン用最終兵器だからな。ああ、かわいい……。」

「ユイちゃん、駄目ですよ。」

「いいではないか、小毬君。」

「それでは、少年。何かあったらすぐ私達に言いたまえ。出来るだけ協力しよう」

「あ、ありがとう、ございます。」

「んじゃ、とりあえず校内でも見てまわっか」

「え？でも……こんな遅くだし。」

時間はもう6時を回っていた。

季節はもう冬に近いので、辺りは薄暗い。

「ん？ああそっか。わりいわりい、今日はお前も疲れたよな。」

「？。いや、そうゆうわけじゃ」

「よし、今日のところは寮に帰るか。」

「寮？」

「ああ、俺達は寮住まいなんだぜ。」

「そうなんだ・・・。」

全員で真人についていく。

すると、数分で寮らしき建物が見えてきた。

「これが俺達の寮だぜ。そんであっちは女子寮。」

「ちなみに女子寮は男子禁制だぜ。」

「リキは特別ですから出入りOKです。VIP・VIPER・VIPER
PEST! なのですっ。」

クドをスルーして寮の中に入る男子。

「ガーン！Perfectスルーですっ!？」

「あつ、クーちゃん今のPerfectはうまかったよ。」

「ありがとうございますっ小毬さん。」

そんな会話が聞こえてきたり来なかったり。

「ここが俺達の部屋だぜ。」

「二人部屋でな、お前と真人がこの部屋だ。ついでに言うと俺はあそこの部屋だ。」

二人にあれこれと寮の規則や暗黙の了解などを教わっていると、

ガラッ

「よお、ここにいたのかお前ら。もうそろそろ飯だぜ。」

どこかに逃げた恭介が帰ってきた。

「おお恭介。どこにいたんだよ。」

「聞かないでくれ……。」

恭介がぶつぶつと何かつぶやいているなか、僕達は食堂で晩ご飯を食べた。

僕だけが知らない。

僕の事をたくさん聞きながら。

聞いた話の中の人物は、

僕よりおもしろく。

僕より優しく。

僕より強く。

まるで、ヒーローを見ているかのようにだった。

すっかり寝付いた真人のいびきをうるさいと思いつつ、僕は考える。

『僕』は何者なのか。

どんな風に笑い、

どんな風に怒り、

どんな風に泣き、

どんな風に生きていたのか。

『僕』の人生は、今の僕の人生なのか。

記憶が無いと思っていた。

医者にも記憶喪失だ、と言われた。

しかし、僕は『僕』の話を聞いてもなにも感じない。

なにも、思い出せない。

もしかしたら僕は、『僕』ではないのかもしれない。

そうしたら、僕は誰だ？

『僕』は誰だ？

僕と『僕』の関係は？

僕とみんなの関係は？

『僕』とみんなの関係は？

考えているうちに、闇が僕に迫ってくる。

(あ．．．くる．．．。)

深い闇へと、

落ちて．．．いく．．．。

．
．
．
．
．
．

．
．
．
．
．
．

．
．
．

第一話『記憶喪失』（後書き）

いかがでしたでしょうか。

第一話『記憶喪失』

ありきたりだと充分理解しています。

下手くそだと我ながら思います。

ですが、まえがきで言った通り。

書きたいものを書こうと思いますので、

どうか暖かく見守っていて下さい。

「・・・私の出番は？」

それでは、第二話も近いうちに投稿したいと思っていますので
そちらもよろしくお願い申し上げます。

リトルバスターズ!と

このサイトと

読者の皆様に、

感謝いたします・・・。

第二話『直枝理樹』（前書き）

「ヤッホー！（＾▽＾）ノシ

また今回も出番がないアシスタントの美鳥でゝす。

いきなりんだけど、第二話『直枝理樹』始まるよゝ。」

第二話『直枝理樹』

救急車のサイレンが聞こえる。

バスが落ちている。

爆発した後みたいだ。

誰かが泣いている。

誰かが倒れている。

そこに、『僕』はいた。

世界が回る。

『僕』は繰り返す。

やめろと言われても。

決して諦めることはなく。

隣に誰かがいる。

『僕』ではなく、

僕に話しかけてきた。

「私の手を、引いてくれ。」

君は・・・誰だ？

なんで、僕なんだ？

すぐ近くに、『僕』がいるじゃないか。

僕は・・・弱いんだ。

『僕』よりずっと。

だから僕は君に答えることはできない。

僕では、また、繰り返してしまうから。

弱いままの僕では。

『僕』が、僕に話しかけてきた。

「じゃあ、思い出して。
きつと、君は覚えてる。」

」

なにを？

「僕と君しか知らない世界の秘密を。」

世界の・・・秘密？

「僕は見つけた。そうして強くなれた。」

「僕と君は一緒だから。」

きつと、君は知っている。」

「だから、希望を見失わないで、捨てないで、諦めないで、信じて。」

「君は僕なんだから。」

ピピピッ

目覚まし時計に起こされて寝ぼけ眼で時間を確認する。

（もう、こんな時間か・・・）

すると、あることに気が付く。

（あれ？ 真人は？）

・・・真人がいない。

トイレだろうか。

数分経っても戻ってくる気配がない。

僕は何故か恐くなり、謙吾の部屋を訪れる。

「・・・謙吾？」

やっぱり、いない。

部屋に戻り、冷静に考える。

夢の内容は覚えてない。

だけど、あの二人がいたのは確かな記憶だ。

（どこからが、夢だったんだ・・・？）

もしかしたら・・・全部夢で、僕は『直枝理樹』ではないのかもしれない。

（そうしたら・・・なんであんな夢なんか・・・）

考える・・・

ガチャッ

「いや、今日はいつもより走っちまったぜ。筋肉がいいかんじにあったまっちまってよ。」

真人が帰ってくる。

「ん・・・お帰り真人。・・・真人？まさとっ！！」
いきなり理樹が真人に飛びついた。

「うわっ、なんだ理樹。」

「起きたら真人が居ないから・・・。」

「ああ、すまんな理樹よ。お前に言っておくべきだったか。」

今にも泣きだしそうな理樹の頭を、撫でる真人。

それは、ある人にとっては大好物であり、

ガチャッ！！

「直枝さん、井ノ原さん。朝ご飯です・・・よ？」

「よお西園。どうした？固まってるが、大丈夫か？」

真人の胸に顔を埋める理樹。

それを撫でている真人。

「・・・アリです・・・。」

バタッ！！

いきなり卒倒する美魚。

「どうした西園！大丈夫か！？」

後ろにいて状況が把握できていない恭介が介抱する。

「ごちそう・・・さまでした・・・（ガクッ）」

「西園ー！？」

「なんだ？みおはどうしたんだ？」

鈴も遅れてやって来る。

そして二人は状況を把握する。

『ああ、なるほど。』

「で、何やってんだお前ら。」

「いや、いきなり理樹が抱き着いてきてよ・・・」

「直枝×井ノ原・・・カハッ」

「みおはもうだまってろ」

「で、どうしたんだ、理樹。」

恭介に問われてから、
何故こんなことを真剣に考えていたんだろう。
と思うと、いきなり恥ずかしくなってきた。

さて、どうしよう。

『正直に言う』

いや、恥ずかしい。却下。

『ごまかす』

何か変な誤解が生まれそうだから却下。

『話を変える』

よし、これでいこう。

僕は真人から離れて一言。

「こ、この人は？」

「ああ、こいつも俺達の仲間で、名前は西園美魚。」
よし、話を変えられた。

その後、恭介の紹介が続く中、僕は。

（そんなこと、あるわけないか。）

そう、思うことにした。

放課後。

「なぜでしょうか。あれは・・・夢だったんでしょうか？」

西園さんの独り言を聞こえつつスルーした僕は、

女の子に拉致られていた。

体育倉庫に連れて来られ。

「理樹君！？記憶喪失って本当！？」

「え、う、うん。そうみたい。」

「あたしのこと、覚えてないの！？」

「うん・・・ゴメン。」

「そんな・・・」

今にも泣きそうな女の子に、僕は言った。

それは、僕が言おうとしていた言葉ではなく。

口からどんどん溢れてくる言葉に、僕は気づいた。

(これは・・・『僕』?)

・・・そうだよ。

声が聞こえる。

・・・言ったよね、君は思い出せるってこと。

(うん・・・。)

・・・だから、僕が手伝ってあげる。

さあ、手を取って。

歩きだそう。

僕が歩いて来た道を。

大切なことを。

大切な人達を。

思い出す為に・・・。

この世界で、君は。

急に、世界が廻りだす。

(この・・・感覚は・・・。)

僕の世界は闇に落ちた。

第二話『直枝理樹』（後書き）

いかがでしたでしょうか？

不定期更新ですが、第二話。投稿させて頂きました。

筆者はこの間5回目プレイのリトルバスターズ、葉留佳ルート。終了しました。

いやー、何回やってもいい話はいい話ですね。

個人的にはさささとみおとくるがやルートが気に入ってます。

次回も、頑張っていきたいと、思っています。

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様へ

感謝いたします・・・。

美鳥ルート第三話『転校生×2』（前書き）

こんにちは。

不定期ですが更新していこうと思います。

おい、美鳥。

・・・いないみたいです。

それでは本編スタート。

美鳥ルート第三話『転校生×2』

「理樹。そろそろ起きねえと遅刻すつぞ？」

真人に起こされた時はかなりギリギリの時間だった。

「ごっ、ごめん！真人まで・・・」

「いいよ気にすんな。よし、早くいこうぜ。」

ダッシュで教室に着き。

席に座った頃に予鈴がなった。

・・・だけどおかしい。

いつもならうちの担任はもう来ていて、遅刻してきた人に軽いゲンコツをくれているところなのに、もう、10分経っている。職員会議にしては長い。

（このままだと、授業始まるんじゃない？）

ガラッ

「いや、悪いなみんな。ちょっと長引いてしまつて。」

先生がきた。

けどなんか雰囲気がちがうぞ？

そう思っていると、先生は話し始めた。

「ま、隠すのもなんだからな。実は今日から仲間が増えるんだ。」

ザワ・・・ザワ

え？それって転校生？と、教室の全員がざわつく。

「みんな静かにしろ。それじゃ、紹介するぞ。」

ガラッ

廊下から二人の女子が入ってくる。

「まず、真から。」

「え、えっと。ま、真 美茶子っていいいます。」

転校生にあわせて、先生が黒板に名前を書く。

真^{まこと} 美茶子^{みさこ}さんか・・・。

「・・・ので、みなさんよろしくお願いしますっ!」

パチパチパチ・・・

「はいでは次、西園。」

西園？なんか聞いたことあるような・・・

「ハ―イ、私は、西園美鳥っています♪あ、ちなみにそこにいる美魚さんは私の双子の姉なので、よろしくね。」

ザワザワザワ・・・

ガタッ

西園（美魚）さんがいきなり立ち上がった。

すると、

一斉に西園（美魚）さんに全員の視線が集まり。

「・・・よろしく願います。」

と、それだけ言って、席に座った。

パチパチパチ・・・

「よし、それじゃ授業はじめるぞ。二人は空いてるそこの席をつかえ。」

昼休みに、珍しくリトバスマンバー全員で昼食をとる。

みんなが食べ終わる頃に、恭介が話し始める。

「えーおほん。みんな、気づいているだろうとおもうが、新メンバーの発表だ。」

「新メンバー。西園の妹。西園美鳥！」

恭介の後ろから美鳥がでてきた。

「ヤッホー！ってわけだから、よろしくっ♪」

「と、ゆうわけだ。だから、歓迎会を行う！」

「日にちは明日。夕飯時に行く。持ち物は、一人一つずつプレゼントを持ってきてくれ。
プレゼントを交換するからな、自分しかわからないように、包装してきてくれ。」

全員が頷く。

「よし、じゃあ頼むぞ。」

そうだ、小毬はちよつと話しをしたいからきてくれ。」小毬さんが恭介に連れていかれ、みんなはそれぞれ解散する。

「ねえ理樹君。明日プレゼント買いにいかない？」

やることもなく、ただぼーっとしていた僕に、美鳥が話しかけてきた。

「?、僕でいいの? 西園・・・じゃなかった。美魚さんとはいかないの?」

「そうしたいんだけどさ、それじゃ、万が一お姉ちゃんにあたしのプレゼントが当たった時に残念じゃない?」

「ああ・・・僕ならいいってことか・・・。」

「ち、ちがうよ!! そうじゃなくって」

顔を赤くしてモジモジしだした。

その仕草に、僕はドキッとしつつ、こう続けた。

「いいよ、行こう。」

「・・・はえ?」

「一緒に行こう。明日はちょうど暇だしさ。僕も、プレゼントどうしようか迷ってたところだしさ。」

「理樹君・・・。」

その瞬間、美鳥は僕にいきなり抱き着いてきた。

「えへへ、ありがとねっ♪」

美鳥が僕から離れる。

(なんだろう、この感じ・・・)

「じゃあね。」

美鳥と別れる。

そのあとの授業も、僕は胸がドキドキしっぱなしだった。

放課後、部屋に戻った僕と真人は、それぞれに宿題や筋トレをしている。

「理樹、何かあったのか？」

筋トレをしながら真人が聞いてきた。

「いきなり何さ、真人。」

「だってよ、お前、始めてからページ進んでねえぞ？」

「え？」

見てみると、最初のページの、二問目で止まっていた。

「もう1時間近く経つのによ。何かあったのか？」

「いや、別に何も・・・」

（てゆうか、1時間近くもその筋トレやってたのか！）

「理樹・・・お前、何か隠してないか？」

「いやいや、そんなこと」

「西園妹か？」

「え？」

「西園の妹のことで悩んでいるのか？」

「いやいやいや・・・」

僕の顔が熱くなっていく。

「それは・・・ズバリ恋だな。」

ガタッ

「そ、そんなこと、な、ないによ!!」

「どんだけ動揺してんだよ、・・・そうかそうか、理樹もそういう年頃か。」

「いやいや、好きとかそうゆうんじゃないかって、なんてゆうか、・・・か、かわいいってゆうか。」

「外見なら西園も同じだろ？」

「外見じゃないよ・・・、なんてゆうか、かわいいんだよ・・・。」

「ふーん、ま、俺にはわからんけどな。」

「な、なんでわかったの？」

「なんでって、俺の筋肉がお前の筋肉に話しかけたからに決まってるんだろ？」

「いやいや、当たり前のように言わないでよ……。」

（とうとう会話まで!?!）

「それでさ、明日、一緒にプレゼント買いに行くことになったんだ。」

部活が終わった謙吾も仲間に入り、（恭介はいなかった）話の続きを始める。

「なるほど、それで明日の作戦を立てるわけだな。」

「なあ謙吾っち、恭介の野郎はどうしたんだ？」

「メールしたが帰ってこない。大方、明日にろくでもない事を考えているんだろう。」

「そうかよ。」

「で、どうするんだ、理樹。」

「どうするって言われても……僕こういうの初めてだし……。」

「ふむ……ではこうしよう。ちょっと耳を貸してくれ、二人とも。」

僕らしか部屋に居ないのに小さくなってヒソヒソと謙吾が話します。

・・・数分後・・・

「と、いうわけだ。」

「さすが謙吾っち。いいアイデアだな。」

「いやいやいや、これはちよっと・・・」

「心配するな、理樹。俺は百戦錬磨、無敗の男だぞ。」

「恋愛はちがうでしょ・・・。」

「大丈夫だって、俺達がなんとかしてやる。」

「ええー!?!」

「それじゃ、明日。」

「おうよ。」

謙吾が自分の部屋に戻り、僕達はもう寝るだけだ。

「理樹。明日は頑張れよ。」

「うん、なんかいろいろごめん。」

「謝る必要なんてないさ。リトルバスターズの誰かの幸せは、俺達の幸せだ。だから、今日はもうねて、明日に備えようぜ。」

「うん、ありがとう。おやすみ真人。」

「おやすみ。」

数分後に真人のいびきが聞こえてきた。

僕は考えた。

何か、大切なものを忘れてないか・・・？

考えているうちに眠たくなり、僕の意識は闇に落ちた。

「・・・美鳥？」

『何？お姉ちゃん。』

「あなたは・・・誰なの？」

『お姉ちゃんの知ってる、美鳥だよ。』

「そんなはずは・・・あなたは、あの世界でしか存在できないはず。」

『うん。でもね、お姉ちゃん。問題は簡単なんだよ。』

「問題？」

『最近、周りで何か起こらなかった？』

「・・・直枝さんが、記憶を無くしました。」

『そう、それだけ。』

「それだけで？」

『それだけのことだけど、あの人はそれを恐れた。だから、また繰り返すことになって、美鳥が選ばれたってわけ。』

『だから、またちょっとの間だけだけど。』

『今度は・・・いっぱいお話ししようね。お姉ちゃん。』

「美鳥・・・。」

「あしたの歓迎会、楽しみですね。」

『・・・うん!!』

美鳥ルート第三話『転校生×2』（後書き）

「みんな。美鳥が初登場だよ。」

ですね。

「しかもヒロインだよ。」

ですね。

「双子設定ってところがすでにかぶってるよ。」

ですね。

「次回からはあたしが魔王になって勇者をボコボコにしてやるんだよ。」

んなわけない。

「とゆうわけで、次回、『魔王美鳥、現る』お楽しみに。」

ありませんよ。

いきなり世間話ですが、最近リトバスと平行してクラナドも久しぶりに始めてみました。

私は、渚ルートを外すと、寮母ルートが一番だと思います（キリッ）

それでは今日はこの辺で・・・

リトルバスターズと、
このサイト様と、
読者様に、
感謝いたします・・・。

第四話『初デート?』(前書き)

どうもお久しぶりです。

ちょっといつもより長めですが、

どうぞ、お楽しみ下さい。

本編スタート!

第四話『初デート?』

目覚まし時計で目が覚める。

朝はまだ早い。

真人は・・・筋トレに行っているようだった。

（そうか・・・今日は。）

土曜日。

そして、美鳥と買い物に出掛ける日だった。

待ち合わせまでまだ余裕がある。

僕は一人で朝食を済ませ、部屋に戻り、準備をする。

髪型を整え、準備は完了したが、時間はまだまだ余っている。

（集合場所は・・・駅前だっけ。）

昨日、美鳥からメールがきて、

『ヤッホー理樹君♪お姉ちゃんにアドレス教えてもらったよ。』

それで、用件なんだけど、明日は10時に駅前集合ね。楽しみにしてるからね♪

美鳥

』

（あと、二時間近くあるよ・・・。）

（そういえば、昨日謙吾がジュース全部飲んじゃったんだっけ。）

昨日、計画を立てたあと、

『なぜ俺には出会いがないんだあー！』

『おい！謙吾！それは理樹の・・・』

ゴクゴクッ！！

というわけだった。

時間が経っておとなしくなってから帰ったけど大丈夫かな？と心配もしてみる。

（暇だし、買いに行くかな。）

途中、クドを見かけたけど、電話してるみたいだったから、そのまま自販機へ。

（こ、これは・・・。）

自販機はほぼ売り切れで、二つくらいしか残ってなかった。

まず、ひとつ、

《味噌カツジュース》

（何これ！？）

これ商品として成り立ってるの！？）

もうひとつ、

《どろり濃厚ピーチジュース》

（あ、まともっぽいな。少なくとも味噌カツよりは・・・。）

ピーチジュースを買う。

ガシャンという音とともにそれが出てくる。

（どんな味なんだろう・・・。）

早速飲んでみることにした。

ストローを挿し、吸おうとする。

・・・吸えない。

ジュースを振ってからまた挑戦。

・・・ドュルツ。

・・・吸えた。

（てゆうか、いまのジュースを吸った音じゃないよね！？）

たしかにピーチの味はするが・・・これ・・・

（喉が・・・渴く。）

同時に、胸やけもしてきた・・・。

もったいないので、全部飲み干した。

（うう・・・ネタジュースは置かなくていいよ・・・。）

食堂にいき、水をもらってから、部屋に戻る。

（そろそろ行こうかな。）

時間も、40分前。

待ち合わせに遅れるわけにはいかない。

今出れば、20分前には着く。

（まあ、少し早く行っても大丈夫かな？）

そう思いつつ、部屋を出た。

すると、恭介からメールが。

『よお。』

お前・・・今日何やら面白い事やるらしいじゃねえか！

俺も参加させてもらうぜ!』

(・・・)

・・・ため息しか、出てこなかった。

先ほどの恭介からのメールを不安に思いつつ、僕は待ち合わせ場所の駅前に到着。

(あと20分か・・・、さすがに早く来すぎたかな。)

と思っていると、

「りっきくくん♪」

美鳥が前から走って来る。

「ごめん理樹君。待った?」

上目遣いで不安そうに僕を見上げる美鳥。

今日は暖かい事もあってか、秋だというのに僕も美鳥も半袖だ。

美鳥は、白のワンピースという、シンプルな格好だが、美鳥自身も、周りからしてみたらかなりの美少女なので、

(なんてゆうか・・・。)

「ん？どうしたの？理樹君。」

思わず見とれてしまった。

「ねえ、理樹君？」

僕の顔を覗きこんでくる美鳥。

正直、美鳥がする行動の全てにドキドキしていた僕は、

「ふ、ふええ！？な、何？美鳥さん。」

まるで小毬さんのような慌て方をしてしまった。

「あははっ、ホントどうしたの？顔真っ赤だよ？」

「いや、あの、こ、これは、今日意外に暑いな〜って。」

「ふ〜ん、あたしに見とれてたんじゃないのか〜、ちょっとガツカリ。」

すいません、かなり見とれてました。

「い、いや、今日の美鳥、かわいいよ。」

「ふえ？そ、そんな理樹君。かわいいだなんて・・・／／／／」

あ、顔真っ赤にして俯いてる。

（ああ・・・かわいい。・・・って僕は来々谷さんかつ!？）

自分にツツコミを入れ、美鳥と向き直る。

「じゃ、じゃあ、そろそろ、いこっか。」

「・・・うん／＼／」

僕は電車で隣町の繁華街へ向かう。

「わゝ、スッゴくかわいい! あっ、こっちのもかわいいゝ!」

そして今、女の子向けの小物店にいる僕と美鳥。

僕は男なので、なんてゆうか、正直場違いなんじゃないかとソワソワしてしまう。

『大丈夫だよ。理樹君女の子に見えるから♪』

店に入る前に美鳥に言われた言葉が、心を痛くする。

僕達（男達）の計画まで、あと少ししかない。

「ねえ理樹君。どっちがお姉ちゃんに似合いそうかな。」

そう言って美鳥は、黒いクマのぬいぐるみと、水色のウサギのぬいぐるみを見せてきた。

（うゝん、美魚さんに似合うのか。）

少し悩んだあと、水色のウサギのぬいぐるみを選んだ。

「へえー、理樹君は黒い方を選ぶと思ったのに。」

「え？だめかな？」

「ううん、だめなんかじゃないよ。選んでくれてありがとう♪」

「うん、・・・なんか、美魚さんには黒は似合わないなって思ったから。もちろん、美鳥にも。」

「ふゝん、どうしてそう思ったの？」

「なんでだろう、よく、わからないけど、この前、本を読んだんだ。」

「その本でさ、本人と影が入れ替わっちゃうって話があってさ、それで・・・あれ？なんか前にこんなことが・・・。」

目の前が揺らぐ。

（こんな・・・ときに・・・。）

僕の視界は、一瞬で黒に包まれる。

意識は・・・闇に・・・落ちていく・・・。

『ありがとうございます。』

・・・微かに聞こえた言葉に、僕は目を覚ます。

そこには、ずぶ濡れの僕と西園さんがいた。

「みお・・・さん？」

『はい。そうですよ、直枝さん。』

僕は思い出した。

美魚は自分の『影』の存在に悩み、苦しみ、『影』になろうとしたこと。

そんな美魚を僕は助けた、ということ。

「美魚さん。美鳥は・・・。」

『直枝さん。大丈夫ですよ。美鳥はずっと私の中に居ますから。それに・・・、』

『私、いえ、私達には、直枝さんが居てくれるのでしょ。』

『だから、大丈夫です。』

『・・・安心します。』

「うん、ありがとう。」

「僕は、ずっと、いつまでも、美魚さんと、美鳥の側にいるよ。」

『ありがとうございます。でも今は、ゆっくり眠って下さい。』

世界が揺らぐ。

『それ』は、いつもの悲しいものじゃなく。

優しく、包まれるような感覚。

光に・・・包まれて・・・

目が覚める。

と同時に声が聞こえた。

「理樹君!・・・よかった。」

「あれ？僕は・・・。」

さっきまで僕は、あの海辺に居たはずだ。

今は、会議室のような椅子と机がある部屋に横たわっていた。

そして、目の前には。

「理樹君・・・。すつごく、心配したんだから。」
美鳥が、いた。

(ここは・・・)

元の世界。

しかし、夢の世界の事も鮮明に覚えている。

(いや・・・あれは、多分だけど、夢じゃ・・・ない。)

「美鳥。ありがとう。もう、大丈夫だよ。」

「ホントに？大丈夫？」

「うん、僕のこれは持病みたいなものだから。」

「よし、それじゃあ行こうか。」

お世話になった店の店員さんにお礼を言い。
ぬいぐるみを買って外に出る。

美鳥と歩いていると、ポケットの携帯が鳴り出した。

（メールかな？）

取り出して確認してみると。

《新着メー
ル3件》

『よう理樹。なかなか楽しそうにやってるじゃねえか。・・・これなら、俺達は用無しだな。今日は楽しんでくれよ（＾Ｏ＾）
恭介』

[illegible]

『理樹よ、楽しんでるとこ悪いんだが、謙吾が大変なことになってんだよ・・・帰ってきたら、慰めてやれよな。』

真人』

そういえば僕達が昨日立てた計画のことをすっかり忘れていた。

そして、無駄に怖い謙吾のメール。

（あはは・・・はは。）

笑うしか、なかった。

時間はもう1時を過ぎていた。

「ねえ、何か食べない？」

という美鳥からの要望により、昼ご飯を食べることにした。

近くにちょうどファミレスがあったので、そこに入る。

「いらっしやいませ〜。2名様ですかあ〜。それではこちらの席へどうぞお〜。」

「理樹君。何食べる？」

「う〜ん。」

「カルボナーラにするよ。」

学食にはないので、久しぶりに食べたかった。

「美鳥は？」

「あたしはこのタラコスパにしょっかな。」

注文したパスタが来た。

「わー、理樹君のカルボナーラもおいしそうだね。」

と言って、僕のカルボナーラを一口。

「んはあー、おいしい。」

その食べている笑顔が可愛かったのだ。

「食べたかったら、食べていいよ。」

「ホント！？ありがと理樹君。おいしいよ。」

と言いつつ、僕のカルボナーラを食べる美鳥。

（ああ・・・かわいい。

いやいや、僕は来々谷さんじゃないってば。）

いつのまにか、僕のカルボナーラは無くなっていた。

ちなみに、僕は少ししかたべていない。

それに美鳥は、

「んー、おいしかったー。ってあれ！？理樹君の全部食べちゃった！ご、ごめん理樹君！」

必死に謝る美鳥に、少しばかり悪戯心が湧いてしまった。

「じゃあさ、そのタラコスパを一口ちょうだい。」

「あ、うん、もちろん！」

タラコスパの皿を差し出す美鳥。

「いや、そうじゃなくってさ。」

タラコスパの皿を戻し、目を閉じて口を開ける僕。

「え？っえええ！！だ、ダメだよ理樹君。他にも人いるし・・・／

／

「大丈夫だよ。誰も見てないって。」

ん？なんか会話が変だ。

「は、恥ずかしいって／／／／」

目を開けると、顔を赤くして恥ずかしがる美鳥がいた。

（ヤバイ、なんか変な気分になってきた。そろそろここでやめとこ
う。）

「あははっ、冗談だよ、美鳥。」

「え?・・・」

フォークにしっかり巻かれたタラコスパ。

「もしかして、理樹君あたしをからかったでしょ!」

「あははっ、ごめんって。」

「もう、許さないんだから。」

そういつて、フォークを僕の口に近づけてくる。

そして、

「あゝん。」

もしかしてこれは。

「あゝん」

「本当にするの!?」

「ほら、あゝん。」

「あ、あゝん。」

「それっ」

パクっ。

美鳥が僕にあゝんを・・・。

（うわぁ・・・顔が熱くなってきた・・・。）

「あはは♪理樹君顔真っ赤っ。」

「そ、そういう美鳥も真っ赤じゃないか・・・。」

「・・・。」

そのあと、足早にファミレスをでた。

あとから恭介に言われたが、とてもギクシャクしていたらしい。

（てゆうか、見てたのかな・・・あれ。

もちろんさ☆

b y 恭介

辺りはもう夕暮れに包まれ始めていた。

「そろそろ帰ろうか。」

「うん。」

帰りの電車で、僕達は今日あったことを振り返った。

所々に恥ずかしかった思い出を含めて。

ただ話していて、僕は美鳥の横顔を見つめていた。

「ねえ理樹君。私、思うんだ。」

「楽しい日々が、ずっとずっと続けばいいのにつて。」

「でもね。それは違うんだ、とも思ってる。」

「だって、私達はこの世界の永遠が、手に入らないことを知っているから。」

「手に入らないけど、思い出すことはできるから。」

「それだけで、充分だから。」 「だから、今日は、楽しい思い出を、ありがとね♪」

そう言った美鳥の目が涙ぐんでいる事に気づいた僕は。

「こちらこそ、ありがとう。」

「でも、楽しいことはこれからまだまだ続くんだから。」

「楽しいことは、まだまだたくさん待っているから。」

「だから、皆で分け合って、それを、皆で笑いあえるから。」

「ちよっと早いけど、言わせてほしいな。」

僕は、精一杯の笑顔で。

「リトルバスターズへようこそ！これから、よろしくね、美鳥。」

「うん！こちらこそ・・・よろしくね！」

夕日を背にした美鳥の笑顔は、

切なくて、夢げで、それだけで、僕は確信した。

（やっぱり、僕は・・・）

第四話『初デート?』（後書き）

いかがでしたか？

僕自体デートとかの経験は少ないので、あまりイチャイチャしてる表現が浮かびませんでした。

それと、理樹の記憶喪失の件ですが、それについては、後々と書いていきたいと思いますので、

どうかお付き合い下さい。

それでは次回、歓迎会の話です。

リトルバスターズ！と

本サイト様と

読者様に

感謝いたします・・・。

恭介視点第一話『理樹の記憶』（前書き）

こんにちは、

今回は恭介視点で書きました。

一応本編ではないです。

それではスタート！

恭介視点第一話『理樹の記憶』

鈴と小毬と買い出しに行っていた恭介は、帰りがけの理樹と美鳥に出会う。

「よっ、今帰りか？」

「うん、恭介達こそどうしたの？」

「ちょっと今日の準備をな。」

俺が理樹と話している間。

「美鳥ちゃん私服かわいいよ。」

「そうだな。かわいいぞ、みどり。なんてゆうか、こう、にゃふにやふしたくなる。」

「そんなことないってば、ただの白ワンピだよ。」

女子同士の会話がはずんでいた。

「なあ理樹。何か思い出したか？」

「思い出すって、何を？」

「・・・理樹？お前、記憶喪失じゃなかったのか？」

「記憶喪失？何のこと？」

「・・・」

「じゃあ、逆に聞くが、修学旅行での事故をおぼえているか？」

「事故？いやいやいや、そんな物騒なこと言わないでよ。」

「じゃあ、どこかで事故がなかったか？」

「うーん・・・あ、確か、春あたりに、併設校のあるグループが、旅行中に事故にあったって話は聞いたことがあるよ。」

「・・・」

（それは、俺があの世界でついた嘘のはずだ。）

（てことは、理樹は、記憶が無くなった事自体を忘れているのか？）

「・・・」

「どうしたの？恭介。」

「ああ、なんでもないんだ。いきなり質問して、悪かったな。」

「いや、気にはしとないけどさ・・・。」

「なんでもない、忘れとけ。」

そういつて理樹の頭をくしゃくしゃにしてやる。

「さ、このあとは美鳥の歓迎会だ。楽しもうぜ、理樹。」

「そういえば、何を買に行ってたの？」

「それは、歓迎会でのお楽しみだな。」

「あ、そうだ、理樹。場所は食堂じゃなくなって、中庭でやることにしたから。」

「どうして？」

「さすがに食堂は貸し切れなかったんだ……。一応メールししたが、皆にあったら伝えてくれ。」

「それと、旅行に行ってた三枝達が帰って来るからな。」

「葉留佳さんたちが？」

「!?!?!」

「恭介？」

「あ、いや、なんでもない。」

（普通にしゃべっちゃまった。つか、どこまで覚えてんだ？）

（試してみるか……。）

「なあ理樹、リトルバスターズのメンバーを全員言ってみてくれ。」

「え？何さ、いきなり。」

「いいから。」

「別にいいけど・・・、恭介、鈴、真人、謙吾、小毬さん、葉留佳さん。」

「それと、クド、西園さん、あと、美鳥。」

「たしか、これで全員だね。」

「来々谷は？」

「え？」

「来々谷がいるだろ、あと。」

「？」

「理樹、覚えてないのか？」

「・・・ああ！来々谷さんか。思い出したよ。」

「・・・」（いま、なんで来々谷だけがでてこなかったんだ？）

「理樹・・・。」

「どうしたの？」

「西園は名字なのに、美鳥は名前なんだな。」

「えっ、それは、二人とも同じ名字だから・・・。」

「ハハッ気にすんな。冗談だ。」

「もう・・・／＼／＼」

（うわ、理樹が照れてる。男の俺でもかわいいと思ってしまうほどだぜ・・・。）

（つか、この反応、本気だな・・・。）

学校に着く。

「よし、それじゃあ、全体の集合時間は19：00だからな。それじゃあまた。」

全員にそう伝えて、中庭に向かう。

恭介視点第一話『理樹の記憶』（後書き）

いかがでしたか？

別視点の物語も並行して進みます。

ややこしくなるかもしれません・・・（▽₁）；

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様に

感謝いたします・・・。

第五話『歓迎会準備』（前書き）

今回は理樹視点で進みます。

スタート！

第五話『歓迎会準備』

18..30

買い物も終わり、部屋に戻っていた僕は、一応早く行っておこう、
と思い。中庭に向かっていた。

ちなみに、僕が買ったプレゼントは、美鳥と同じ店で買ったハリネ
ズミのぬいぐるみだ。

（女の子のほうが多いんだし、大丈夫だね。）

と言う理由である。

中庭に着くと、もう準備が終わっているようだった。

（こんな早く来なくてよかったかな・・・。）

すると、誰かの話し声が聞こえた。

恭介と、・・・黒髪の長い、綺麗な女性だった。

といっても、服装は制服である。

（誰だろう、あの人。・・・どこかで会った気がする。）

数分して、その人はどこかへ行ってしまった。

「ねえ恭介。さっきの人って・・・」

「な、なんだ理樹か。びっくりさせんなよ。」

「ああ、ゴメン。それで、さっきの人は・・・」

「なんでもない、気にすんな。」

笑いながら恭介が僕に言う。

「さあ、準備も終わったし、あとは皆を待つだけだ。」

少しして、鈴、小毬さん、真人が到着した。

「なんだかよくわからんが、筋肉が楽しいってよ。」

「そ、そうか。それはよかったな。」

真人の意味がわからない言葉を取りあえずスルーする。

「鈴、どんなプレゼントにしたの？」

「言うか、ボケー。」

突然威嚇し始める鈴。

「鈴ちゃん。ケンカはダメだよ。」

それを、小毬さんがなだめていた。

「うみゅー、小毬ちゃんがそういうなら。」

「それと、理樹君も、交換会の前にそんなこと聞いちゃだめだよ。」

「うん、僕が悪かったよ。ごめんね、鈴。」

「あ、あやまるんじゃない。」

次に、西園姉妹がやって来る。

「うわぁー、なんだかすごいね。」

「私も、少しは手伝いましたから。」

続いて、クド、葉留佳さん、二木さんがやって来る。

「やはー皆の集。私はリトルバスターズに帰ってきたあ!!」

「わふー、葉留佳さん。その言い方は間違ってると思います。」

「あなた、一体どんなキャラなの？」

「ようこそ、俺主催の西園美鳥歓迎会へ！」

パチパチと拍手が起こる。

「おい、ちょっと待て。」

「どうした真人。」

「どうしたもこうしたも、おかしいことばかりじゃねえか。」

「なにがだ、言ってみろ。」

「チッ、分かってるくせによ。」

「謙吾と来々谷はどうした。」

「遅れてくるさ。」

「・・・まあいい。それと、なんでここに風紀委員長様がいやがるんだ。」

「いいじゃない。別に。」

「そうだ、いいじゃないか。」

「よかねーよ！こんなところ、別の奴らに見られたらどうすんだ。」

「へえ、貴方にも優しい所あるじゃない。」

「だが真人、その辺はぬかりない。」

「ほかの委員には休みを言い渡しておいたし、私は貴方達を監視する役目でここにいるからよ。」

「・・・そっかよ。なら、いいや。」

「サンキュな、真人。」

「うるせえよ。そら、いくぞ」

「行ってくて、どこに。」

「あいつら迎えにいくんだろうが。」

「・・・わかったよ。」

「理樹、俺と真人で来てない奴迎えに行ってくるから、ちょっと待っててくれ。」

「うん、わかった。」

真人と恭介は、中庭を後にした。

第五話『歓迎会準備』（後書き）

いかがでしたか。

ここから、ちょっと本編から離れてしまいます。

どうか暖かく見守って下さい。

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様に

感謝いたします・・・。

第六話『暖かい場所』（前書き）

どうも。

この話は、まあ、自分にとっては結構な山場だと思います。

それでは、スタート！

第六話『暖かい場所』

（来々谷視点）

18..00

恭介氏に呼び出された。

あの人は、何を考えているか私でもわからない。

あの世界でのことも、それからのことも、あの人は多分、全部知っていたのだろう。

私が、こうなることを。

「よ、元気だったか？」

「・・・」

笑顔でこちらに話しかけてくる。

「新しいメンバーが増えたんだ。それがまた、西園の妹だよ。」

「・・・」

なんでもない世間話を持ち出してくる。

もう話し出してから10分は経っただろうか。

急に、恭介氏の顔が真剣になる。

「本気でやめんのか。」

「・・・そのつもりだが？」

「みんな、悲しむぞ。」

「もう私の事なんて覚えていないさ。」

そう、メンバーの記憶は一部を除いて全部消した。

・・・私が。

「お前は、楽しくなかったのか。」

そんなこと、

「楽しかったさ。」

感情を知らないわたしが、

「楽しかったに、決まってる。」

初めて、『笑う』ということを知ったんだ。

この場所で、
この、メンバーで。

「でも、私がいけないんだ。わがままを通して、世界を壊して、理樹君を傷つけてしまった。全部、私の責任なんだ。」

「皆は、そう言ったのか？」

「・・・え？」

「皆は、お前の責任だ、なんて、一言も言っていないだろ。」

「だって、私は、」

「だってじゃねえ。」

「お前は、お前なりに、理樹を、そして自分を救おうと、強くしようとしたんだろ。」

「結果、それが世界を壊す事になっても、皆はお前を責めたりしない。」

・・・壊れていく。

「・・・嘘だ。」

「お前は、あいつらの笑顔を見ても、同じことが言えるか？」

冷静な私が、壊れていく。

「・・・嘘だ、嘘だ嘘嘘嘘嘘嘘嘘嘘・・・嘘だっ!!」

もう、なにもかもわからなくなっていた。

「お、おい、来々谷？」

正気に戻った私は、なにも言わず中庭を去った。

冷静さを欠いていたからだけじゃなかったのだろう。

物陰で会話を聞いていた、謙吾少年と理樹君に気がつかなかったのは。

（謙吾視点）

理樹とは違う場所で、俺は、話の全てを聞いていた。

来々谷の居場所は分かっていた。

手には、二本の竹刀。

空き教室に入る。

そこには、来々谷が椅子に座っていた。

「今度は君か。君は何の用だ？」

「真剣勝負だ。」

他に言葉はいらない。

竹刀を来々谷に投げる。

「俺が勝ったら、リトルバスターズを抜けるな。」

「・・・私が勝ったら？」

来々谷の目は、何処かを見ていた。

「好きにしろ。」

「・・・丁度いい。今このわだかまりをどうしようか考えていた所だ。」

来々谷の目に殺気が籠る。

「・・・いくぞ。」

瞬間移動かと思うスピードで突っ込んでくる。

しかし、

「甘いつ！」

それを受け止め、間合いをはかる。

「ふふふ、なかなかやるではないか。・・・どんだんいくぞ。」

来々谷の猛攻。

俺はそれを防いでいる。

足元がふらつく。

・・・足をかけられた俺はもう攻撃を防げる体勢ではなかった。

「終わりだ。」

しかし、それを片手で受け止める。

「なに!?!」

そして、残った腕に全ての力を込めて、一気に薙ぎ払う。

「ぐはぁっ!!」

来々谷は、膝から崩れ落ちた。

「俺の、勝ちだ。」

「・・・どうして。」

その来々谷の声は、以前の逞しい来々谷ではなく、一人の、少女のようだった。

「どうして私なんかのためにここまで。」

「おまえが、仲間だからだ。」

「私は、君達を裏切った。」

「そんなことはない。」

「私は、自分勝手に、理樹君と・・・。」

来々谷を抱きしめる。

優しく、強く。

「ど・・・して・・・。」

「仲間だからだ。」

泣きじゃくる来々谷。

そして、

「うう、うわああああああああああ・・・。」

俺の腕の中で、思いつきり泣いた。

その姿はまるで、感情を覚えたての赤ん坊のようだった。

（来々谷視点）

『私も、仲間にいれてくれ。』

初めて君達をみたとき、すごいと思った。

同じ人間が、こうも嬉しそうに笑っているなんて。

それから、君達に興味が湧いた。

そして、仲良くなった。

修学旅行の事故が起きた。

皆で理樹君を強くしようと誓った。

『来々谷さん、好きだ。愛してるって言う方の、好きなんだ。』

理樹君の事を好きになった。

いままで、君達といて、少しでも感情というものを理解しようとしていた私に芽生えた、初めての感情だった。

そして、君にそう言われたとき、嬉しかった。

君のおかげで、私は感情というものを知ってゆく。

だから、それを願った。

願ってしまった。

世界が壊れ始める。

私の弾くピアノと共に。

私が、願ってしまったから。

理樹君に望ませないとした事を、望んでしまった。

私は、忘れていく。

大好きな理樹君が、

大好きだった理樹君へと変わってしまう。

・・・でも、これでいいんだ。

皆のことを裏切った私のことなんか、理樹君は好きになってはくれないだろうから。

・・・忘れて、しまうから。

だから、私は、これで、いいんだ。

そう思うことにした。

修学旅行の事故から、理樹君は本当に強くなった。

そして、私は、以前のように笑えなくなった。

皆で行った旅行も、

文化祭のときも、

体育祭のときも、

私は、人間として笑えなくなった。

理樹君が記憶喪失になった。

原因は不明。

そしたら私は、また願ってしまった。

（ああ、また・・・初めから、やり直せるだろうか。）

浅はかだった。

私は、こんなにも堕ちてしまったのかと、後悔した。

リトルバスターズにいたら、私はどんどん堕ちていく。

甘えてしまう。

すがってしまう。

頼ってしまう。

その結果を、私は。

私は・・・。

だから、抜けることにした。

今度も、私はこれでいいと、

こんな最低で、最悪な女を、忘れてしまえ。

そう、思った。

それで、いいと思ったんだ。

「いいわけあるか！」

謙吾少年の声が脳に響く。

「困ったことがあれば、頼れ！すがれ！甘えろ！」

頭が痛い、わけではない。

「そうして、頼りあって、支え合って、だから。」

なのに、

「だから！俺達は！！！」

「『仲間』なんだよ！！！」

泣いているんだろう。

「そうやって、卒業して、離れ離れになっても、皆でまた会って、笑って、生きていくんだ！」

「それが、俺が大好きな、俺達の、リトルバスターズなんだよ！！！」

「たとえば、誰が、どんなことをしようとも。」

「俺達の仲間を、俺達の思い出を。」

「誰ひとりとして、欠けることは許さない！！！」

涙が、止まらない。

もう、私には感情がない。

そう、思っていたのに。

でも、もう。

いままでの私じゃない。

今は。

これからの私として。

・・・存分に、甘えてやるとしよう。

「・・・願え。」

「今は、あの世界じゃない。だから、お前は、願っていいんだ。」

「そしたら、俺が、俺達が、願いを叶えてやる。」

「だから、願え。」

「守って、くれ。」

「これからの私の人生。君が、君達が、守ってくれ。」

「了解した。」

「あの、えっと、だから。もう一度、抱きしめてくれるか？」

・・・私は、本当に変わってしまったな。

リトルバスターズの人間に、こんな弱い私を見せるなんて。

両方の顔が赤い。

そして、ゆつくりと、抱きしめられた。

「ありがとう。謙吾くん。」

私の願いは、最初から叶えられていたのかもしれない。

だって、ここには。

こんなに、暖かい。

暖かい場所が、ここにはあった。

ドタドタドタ！

ガラッ！

「ここかつ！」

真人少年がいきなり入ってきた。

そして、一番初めに目に入るものが。

抱きあっている私と謙吾くん。

「あ、わりい、間違えた。」

ガラッ

ガラッ！

「って！何やってんだおめえら！！」

「い、いや真人、これはだな。」

「そうだ、私と謙吾くんの邪魔をするな。」

「なっ、来々谷！？」

「・・・じゃ、じゃあ俺はもう行くな。」

「もうすぐ中庭で歓迎会だからよ。早くこいよ。」

「ま、待て真人！誤解を・・・」

ガラッ

タッタッタッ

静まり返る教室に、青ざめている謙吾君。

それを見て私は、笑いを堪えることができなかった。

「ふふふっ、あはは、あははははは！！」

「・・・なんだ来々谷。これからどうするつもりだ。」

「あはは、ふーっ、そ、そんなこと、どうでもいいじゃないか！あははははは！！」

「!?!?・・・そうだな！どうでもいいな！ハッハッハ！！」

二人で、笑いあった。

（理樹君、ありがとう。）

私に感情というものを教えてくれて。

私を、人間にしてくれて。

私を、こんなにも楽しい仲間に入れてくれて。

私は、今。

笑ってるよ。

私が願ったものは、ここに、こんなに近くにあったんだから。

（謙吾視点）

気がつけば来々谷の顔が目の前にあった。

「な、誤解されるなら、いっそ本当の事にしないか？」

「・・・お前は、それでいいのか？」

「君が私を守ってくれるんだろ？」

「フッ、そうだったな。」

「必ず助けると誓った王子様は、お姫様にあることをするんだが、わかるか？ 謙吾君。」

「わからないな、俺は。」

「本当にか？」

「正解を言ってみてくれないか？」

「う、わ、わかった。」

いきなり慌て始める来々谷。

しかし、実際こうやって改めて見ると、来々谷はかなりの美人だ。
流石に、意識しないわけにはいかない。

（意外と、こういう時は可愛くなるんだな。）

顔を赤くする来々谷は、とてつもなく可愛かった。

普段では想像できない程に。

「・・・してくれ。」

「キス、してくれ。」

「了解した。」

そっと唇を合わせる。

「私の事を、これからは唯湖と呼んでくれ。」

「わかった。」

「私が名前を呼ばせるのは、未来の旦那様だけなんだからな。」

「ふふっ、わかった。」

「な、なぜ笑う!？」

「いや、可愛くて、つい。」

「かわ!?!、な、何を言ってるんだ君は!・・・まあでも、悪い気はしない。」

「それじゃあ、よろしくな、唯湖。」

「ーっ!・・・よ、よろしく、謙吾君。」
もう一度唇を合わせる。

そして、歩きだす。

二人の、未来へと。

〈理樹視点〉

「あつ、二人がやって来ましたよ。」

クドが皆に向かって伝える。

「ねえ真人、何があったの?」

「いや、俺からは何も言えねえ。」

「ほんと、何があったんだろう。」

（唯湖視点）

「遅れてすまない。みんな。」

皆が思い思いの文句を私に言ってくるが。

それでも最後には。

『心配した』と、言ってくれた。

「それと、皆に言わなければならない事がある。」

「私と、謙吾君は、今日から。」

「恋人同士だ！」

全く、苦勞するぜ。

記憶を戻さなきゃならねえし、いきなりバトルしだすし、タイミン
グよく入ったと思ったら抱き合うしよ。

・・・ずっと見てたけどよ。

ま、これで一件落着ってことか。

俺の出番は、ほとんどねえな。

また、馬鹿やるとすつか。

実際、俺もよく分かってないしな。

あとは、頑張れよ。

理樹。

第六話『暖かい場所』（後書き）

いかがでしたか？

この話には、自分なりの来々谷ルートの考察も含んでいるのですが。自分でもまだ理解できてないんで。

さて、付き合い始めた来々谷と謙吾は、あとはイチャイチャしてるのみとなっていました。

それと、理樹と美鳥にはどんな困難が待ち受けているのか！？

次回、乞うご期待！

リトルバスターズと
このサイト様と
読者様に
感謝いたします・・・。

第七話『歓迎会にて』

「それでは、西園美鳥歓迎会を、始めるぞ！」

「みんな、準備はいいか？」

「・・・よし、それじゃあ、乾杯！！」

『かんぱーい！！』

「久しぶり、葉留佳さん、佳奈多さん。」

「やはー理樹君、おひさですヨ。」

「久しぶりなのはいいけど、あなた、こんなところで話していいのかしら？」

「え？どうゆう事？」

「？、貴方は、美鳥さんとどうゆう関係なの？」

「い、いや、別に特別な関係ってわけじゃないよ？」

いきなり、葉留佳さん達はコソコソと喋りだす。

（え、理樹君達は付き合っていないの？）

（そうよ、デートまでしたんでしょ？）

つられて僕の声も小さくなる。

（え？、えええ！！なんでそんなことになってるのさ！？）

（恭介さんから聞いたよ。）

（棗先輩から聞いたわよ。）

（・・・犯人はあいつか。）

『さて、それでは皆。プレゼント交換の時間だ！』

・・・丁度いい。

（直枝？なんだか顔がブラックよ？）

（ウヒャー、悪人顔だ！）

（あはは、それじゃあ、行ってくるよ。）

さて、まずはあの人のところに行かなきゃな。

『ルールは簡単。くじを引いて、そのくじに書かれている名前の奴にプレゼントを渡してやれ！』

ワイワイと皆でくじを引く。

『それではいいか?・・・よし、オープン・ザ・くじ!』

くじを開く。

書かれている名前は。

『棗恭介』

(計算通り!)

「・・・理樹君。ものすごく悪い人になっているぞ。ほら、約束の物だ。」

「ふふっ、ありがとう、来々谷さん。」

実は、プレゼント交換の前にある交渉をしていた。

「じつは、かくかくしかじか、なんだ。」

「ふむ、それで見返りは?」

「ゴニョゴニョ。」

「ふふふ、それはいい。」

僕が来々谷さんと立てた計画は。

「はい、恭介。プレゼント。」

「おっ、なんだ？俺を引いたのは理樹だったのか。」
まず一つ、

恭介にメイド服をプレゼントすること。

「・・・おいおい理樹。冗談キツイって。」

そして、

「お、おい、唯湖！これはなんなんだ！？」

「ふふふ、見れば分かるだろう。メイド服だ。」

二つ、謙吾に女装させること。

もともとくじを作ったのは僕だ。

ならば、細工するのもたやすい事。

「ギャー！？」

「真人君にはこれをプレゼントだっ！！」

・・・葉留佳さんが真人にメイド服をプレゼントしていた。

（あれは計算外だが、こちらの目的は果たした。）

来々谷さんに向けて親指をグッとたてる。

（理樹君。作戦成功だ！）

M i s s i o n C o m p l e t e ! !

「りき、あたしからプレゼントだ！」

「あ、鈴は僕のを引いたんだ。」

プレゼントが渡される。

「よかった。りきに当たってくれて。」

プレゼントの包みをを解く。

「馬鹿三人に当たったらどうしようかと思った。」

今、僕が手にしているのは、

フリルのついた。

かわいいメイド服。

「なんでだあああ!!」

結局、男子メンバー全員がメイド服を貰うとゆう大変な事態に陥った。

「井ノ原さん、このかわいいストラップはなんなのですか？」

「ああ、それは筋肉さんストラップさ……。」

「小毬ちゃん、かわいいぬいぐるみをありがとうございます！」

「うん、大事にしてね。」

「謙吾君、ありがとうございますよ。この腕時計。」

「ああ、大事に使ってくれ……。」

「棗先輩、この猟奇的なウサギはなんですか？」

「ああ、今人気のウサギツチさ。大事にしろよ……。」

皆でプレゼントを見せっているなか。

「美鳥。ありがとうございます。」

「いやいやそんな。いいってお姉ちゃん。」

「あなたも、生まれてこれたら。こんなにも人生が楽しかったのですね。」

「・・・それは。」

「すみません、いいっこ無しでしたね。」

「・・・」

こうして、男子メンバー全員が女装をして、歓迎会はお開きとなった。

私は、青い海に住む魚。

貴女は、青い空に住む鳥。

どちらも、同じ青だけれど。

けっして、交わることのない青。

私は、独りで生まれてしまった。

あの青く悲しい空に、あの子を残して。

私は、あの子の影なのに。

影だけが、生まれてしまった。

第七話『歓迎会にて』（後書き）

いやゝ、結構短かったですね。歓迎会。

さて、そろそろ美鳥ルートを終わらせたいと思います。

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様に、

感謝いたします・・・。

第八話『影からの光』

寝ぼけ目で辺りを見回す。

目に入っただのは、

筋トレをしている真人と、静かに本を読んでいる謙吾と、

・・・僕の隣で寝ている恭介。

ガバツ！

「よお理樹。起きたか。」

「いやいやいや、起きたかって・・・。」

「なぜ、起きたら目の前で恭介が寝ているのか。と、言いたそうな顔をしているな。」

コクコク

「ああ、そうゆうことか。それなら・・・。」

（30分前）

「よし、理樹も寝ちまったし、何する？」

「筋トレ。」

「読書。」

「くっ、せっかく集まっているのにそんなことばっかしやがって！」

「いいよ俺は理樹の隣で寝るもん！」

「子供か、おめえは・・・。」

「アホだな。」

く現在く

「とゆうことだ。」

「ふうん。じゃあ恭介殴っていいよね。」

「否定はしない。応援はする。」

ガバツ！

「否定して止めてくれえ！！！」

「やはり起きていたか。」

「ずっと理樹の寝顔見ながらハアハアしゃがって。」

「ちょ、おま、ご、誤解だ！理樹！」

「ふん。」

「しねっ！」

ドガアッ！

冷たい目で恭介を見ていた僕の横から、ハイキックが飛び出した。

「り、鈴。いつから・・・。」

「りきの寝顔は渡さん。」

「鈴さんのモノでもないですよ。」

「よお西園じゃねえか。」

「いつものは発症しないんだな。」

「・・・いつもの？」

「カップリングがどうたらこうたら。そう言ってるやつだ。」

「・・・そうですね。」

『・・・？』

ふと時間をみると、

21..00

「あれ？ 歓迎会って、こんなに早く終わったっけ？」

「歓迎会？ 何の話だ？」

「かんげーかい？ なんだそれは。」

「ほう、この筋肉を歓迎するってか。受けてたつぜ。」

「まて、みんな。・・・とりあえず、理樹。歓迎会とは、何の事だ？」

「え？ だって今日は美鳥の歓迎会じゃ・・・」

「美鳥って誰だ？」

頭の中がぐるぐる回る。

「だから、美鳥とは誰の事なんだ？」

「え、いや、だから、西園さんの妹で、最近転入してきた・・・」

「転入？ 転入生は真とかゆう生徒だったはずだぞ？」

わけがわからなくなってきた。

「なあ西園、お前に妹なんかいたか？」

「・・・いません。」

どうして？

「私は、独りっ子ですから。」

どうして、美鳥が居ないことになってしまっているのだろう。

「待ってよ、みんな。」

「みんなだって、喜んでいたじゃない。」

「歓迎会、楽しかったよね？」

一同が首をかしげる。

「プレゼントだって、みんな選んでたでしょ？」

全員の、視線が僕に集まる。

「ねえ！みんな覚えてないの！？」

声が荒くなる。

「待て、落ち着け理樹。」

「変な夢でも見たんじゃないの？」

「りき、どうしたんだ？」

「・・・」

「・・・理樹もこんな調子だし、今日は帰るな。」

真人を除く全員が部屋を出ていく。

「理樹、早く寝ちまえよ。きっと、明日になったら、忘れてるさ。」

視界が霞む。

また、アレだ。

「・・・全部。な。」

僕の意識は、闇へ堕ちた。

頭がガンガン鳴り響く。

気分が悪い。

ここは教室？

辺りは夕日に包まれている。

ガラッ

ドアが開く。

そして。

「ごめんね。理樹君。」

「いきなり居なくなっちゃって。」

「でも、こうしなきゃいけなかったの。」

「記憶が消えてしまっていたのは、理樹君だけじゃなかったの。」

「私達は、また同じ事を繰り返したくはないから。」

「だから、私が消えないといけなかったの。」

「私ね、本当は、お姉ちゃんの、西園美魚の妹じゃないんだ。」

「『影』なんだよ。」

「・・・お姉ちゃんも、忘れてたんだ。」

「理樹君と手を繋いだ事も、キスしたことも、恋人になった事も全部。」

「だから、あの時の事も全部。忘れてるんだ。」

「お姉ちゃんは、独りじゃないって。」

「そういつてあげればよかったのかな。」

「お姉ちゃんは、『影』なんかじゃないよって。」

「そういつてあげられれば、よかったのかな。」

「・・・もう、行くね。」

「ごめんね、わざわざこんな話聞かせるためにこんな事して。」

「理樹君を傷つけて。」

「でもね。言っておきたい言葉があったの。」

「理樹君が私を忘れたら。もう言えなくなるから。」
「だから、言わせてほしいな。」

「理樹君。聞いて。」

「うん。」

「私ね、ずっとずっと、理樹君の事。」

「好きだったんだ。」

「すき・・・え？」

「美鳥。好きだったんだ。君のことを、会ったその日から。」

「理樹君・・・。」

「僕は、何も出来ないかも知れないけど。」

「君を、傷つけてしまうかもしれないけど、それでも。」

「君のことが大好き。」

美鳥を抱きしめる。

「もう、ひどいよ理樹君は。」

「私が言いたかったこと、先に言っちゃうんだ。」

「・・・ごめん。」

「いいよ、謝らなくて。」

「君が私のことを想ってくれてた。それだけで、十分だよ。」

「こんな私でも、好きになってくれて、」

「ありがとね。」

その時、笑ってる美鳥を見て、僕は言った。

「美鳥！」

「きっと、この世界は繋がってる！」

「だから、僕が帰っても！」

「向こうで、影じゃない君に会えたら！」

「きっと僕が、君と美魚さんを、救ってみせるから！」

「だからその時まで！」

「待っててよ！」

・・・もう、僕の目の前には誰もいなかった。

ある朝。

僕は二人を待っていた。

「ヤッホー！お待たせっ♪」

「30分前に来たつもりなのですが・・・。」

「いやいや、僕も来たばかりだから。」

「それはそうと、なんで美魚がいるの？」

「私も直枝さんに誘われましたから。」

「むゝ、理樹君？」

「え？何？」

「今度は、私だけを誘ってよね！」

「・・・今度は、私と二人だけで買い物に行きましょう。」

「あはは・・・。」

「それじゃあ、行こうか。」

～END～

第八話『影からの光』（後書き）

いかがでしたか？

「なんか終わり方が意味わかんなかった。」

はいはい美鳥は黙ってて。

はいそれでは、

美鳥ルート、終了しました。

そして次のキャラは？

ご期待下さい。

そして、

「たった今から、私がアシスタントになるわ！」

「あ、あんた誰よ!？」

「秘密のスパイ、とても言っておきましょうか。」

「スパイって言っているんだ！」

「あっ」

『・・・』

「そうよ！言っちゃいけないわよ！私は秘密のスパイだし？だって仕方ないじゃない名前のほうが秘密になきゃとか思ってたんだから！だから自らスパイを名乗った私はバカですよはいそうですよ何そこのあなた笑いたいなら笑えばいいじゃない大声で！あーっはっはっは！って！笑いたいんでしょう笑えばいいわほら」

「あーっはっはっは！！」

「・・・」

リトルバスターズと
このサイト様と

読者様に

感謝いたします・・・。

真ルート第三話『昔話』（前書き）

どうもこんにちは。

美鳥ルートが終わったので、時間が空いてしまいましたが。

すみません。

ここからは、

「あたしの後輩、美茶子ルートよ！」

誰だ！？貴様ア！

「あたし？あたしはこの世界の凄腕敏腕スパイ。朱鷺戸沙耶よ。」

・・・その、自分から正体を明かすその性格。

やめといったほうが。

「なっ、うるさいわね！！貴方が言えって言ったクセに！」

いや、それは言ったけど。

「はいはいわかりました!・・・もう。」

それでは、沙耶も活躍するので、ご覧下さい!

「見ればいいじゃない!そしてあたしの馬鹿さ加減を笑えばいいじゃない!笑いなさいよ!あーっはっはっはっはって!」

「あーっはっはっは!」

・・・いやまあ。

真ルート第三話『昔話』

転入生がやって来た。

「はい、それでは自己紹介をしてくれ。」

「はい！え、えっと、真美茶子って言います！よろしくお願いしますましっ」

「・・・お願いします。」

盛大に囃んでいた。

そして朝のHRが終わり、真さんへの質問責めが始まる。

「趣味は？」

「え？えっと・・・」

「部活は何やってた？」

「えと、えと・・・」

「スリーサイズは？（ハァ）ハァハァ」

「はえええ！？ふええええ！」

「・・・来々谷さん。何質問してるのさ。」

「少女の成長を見守るのはおねーさんの役目だ。ちなみに、理樹く

んは一ヶ月前と比べて1?身長が伸びているぞ。」

「ごめん、真さん。・・・みんなも、そんな一気に質問しても答えられないよ。」

『直枝が言うなら仕方ないな。』

みんなが一行に並ぶ。

「あ、ありがとう・・・。」

「いいよ、別に。」

「あの・・・名前は？」

「あ、ごめん。僕は、直枝理樹。よろしくね。」

「よろしく、直枝くん。」

そのあと、一人ずつ質問に答えていく真さん。

「こらー授業はじめんぞー。」

・・・あの人、直枝理樹。

私の、憧れの人。

そして。

・・・憎むべき相手。

放課後。

僕達はグラウンドで練習をしていた。

「そういえば理樹。」

「なにさ、恭介。」

「転校生が来たんだってな。」

「うん。真さんってゆうんだ。」

「で？可愛い子なのか？」

「・・・いきなり何をいいたすんだよ。恭介。」

「真人。俺も年頃の男子だぜ？」

「なかなか楽しそうな話題じゃないか。」

謙吾も入ってくる。

「転校生の真か。なかなか、可愛い女子だったな。」

「でもよ。恭介はロリ……。」

「ロリコンじゃない！ペドフェリアだ！」

「……。どっちもどっちだよ。」

「そうか、謙吾くんは真女史が好みなのか……。」

「何を言う。あくまでも可愛い、という意味だけだ。俺の好みは……。『クドリヤフカ』醤油とって。』だからな。……。ん？い、いやまで、いまのは『はいです。佳奈多さん。』なんだ。……。いや！ちよっと待てえ！！」

「つまり、私は好みではないと？」

「そんなわけあるかあ！」

ドガッ

謙吾にハイキックが綺麗に決まる。

「こんな人前で大声でイチヤつくな。バカップルども。」

「あ、鈴。」

「はっはっは。謙吾くんをいじるのもなかなか楽しいな。理樹くん。」

」

「その辺にしといておきなよ。」

「それと、鈴達は何をやってたの？」

「クドの作った和食をみんなで食べてた。」

「ああ、それで。」

全員が納得。

「？」

そんなありふれた日常を過ごしている間。

ずっと、視線を感じていたのは僕の気のせいだろう。

最近、いろいろあったからなあ。

そう思うことにした。

今、目があった！？

・・・流石、

沙耶先輩がパートナーにするだけはあるわね。

でも、負けない。

この世界で、初めて笑えたのは、沙耶先輩がいてくれたから。

私の、命の恩人なんだから。

夜。

僕は沙耶さんと地下迷宮にいた。

ダンダンダンッ!!

闇の執行部を撃退する。

「ふう〜。今は・・・4階かあ。」

「あの、理樹君？」

「本当は、貴方を巻き込んだ事を後悔しているの。」
「・・・え？それって。」

「元はといえば私の問題だもの。だけど、私のミスで貴方を巻き込んでしまった。それは、ごめんなさい。」

「いいんだよ、沙耶さん。だって、このダンジョン攻略も、一人より二人のほうがいいじゃない。それに、沙耶さんみたいなおかしい女の子をこんな所に一人にしたくないしさ。」

「か、かわあ・・・／／／／」

「だから、むしろこっちからありがとう。」

「う・・・」

「う？」

「ううんがああああああ！！」

・・・すごい勢いで先に行ってしまった。

「待ってよ、沙耶さん！」

僕も走って追いかける。

ミシッ

持っていた暗視スコープが軋む。

（あいつ・・・人がいないのをいいことに沙耶先輩とイチヤイチヤ
イチヤイチヤイチヤイチヤ・・・）

バギッ

（あつ、暗視スコープ壊れちゃった。予備は・・・。）

カチャ

無機質な音が部屋に響く。

「動かないで、質問に答えなさい。」

「なぜ、この場所にいる。見たところ、ここの生徒のようだが。」

「・・・」

（ヤッベー沙耶先輩に見つかった。どしよどしよ!?!?）

「ん? 貴方、ちょっとこっち向きなさい。」

グイッと強引に振り向かされる。

「・・・はあ。」

「さくや先輩♪こんばんわっ☆」

ゴンッ

痛い。銃で殴られた。

「いたっ」

「美茶子。貴女、なんでここに・・・。」

「先輩が優秀なパートナー見つけたって聞いて飛んできました。」

「私はもう消えちゃったのかと思ってたわよ。」

「そ、そんなΣ」

「沙耶さん？どうしたの？」

「そ、それじゃ沙耶先輩！さよならですっ！」

逃げた。

「あ、ちょっと！」

「沙耶さん？誰か居たの？」

「え？ああ理樹君。誰もいないわよ。」

「そう？ならいいけど。」

「さて、行きましよ。理樹君。」

「うん。」

私は、雪国で生まれ、育った。

部活は、小学生の頃からスキーをやっていた。

全国大会にも出た。

だから、腕には自信があった。

「いってきまゝす。」

休日返上で部活。

どうせ部活がない日にも滑っているから、変わらないが。

ドンッ

誰かとぶつかった。

その拍子に尻餅をついてしまう。

「おい、大丈夫か？」

相手は、少年だった。

なぜか肩にオオワシが乗っていたが、

「だ、大丈夫……です。」

「そうか、よかった。・・・ん？もしかして、スキー。やってるのか？」

「え？は、はい。」

「おお！マジか！・・・なあ、練習場まで、連れてってくれないか？」

少年の無邪気な笑顔を見て、胸が高鳴る。

「いい、ですよ。」

「サンキュ！」

練習場へと向かう。

「練習場といっても、ただの雪山ですよ？」

「・・・俺の住んでる町は、あまり雪が降らないんだ。だから、ただの雪山でも、十分楽しいさ！」

「そうですか。」

「おっと忘れてた。俺の名前は棗。棗恭介。よろしくな。」

「あ、私は、真美茶子っています。よろしくお願いします。棗さん。」

練習場につく。

ちなみに、普通のスキー場なので、一般客もいる。

「レンタル料・・・帰りの電車賃が・・・」

棗さんはなにかブツブツ言っている。

もしかして、お金がないんだろうか。

「あの、もしよろしければ、父のをお貸ししますけど。」

棗さんの首が180度回る。

「マジ!？」

「いいですよ。」

「サンキュー! ありがとな! 真!」

うーん、そのクールな顔立ちでその無邪気な笑顔は・・・反則。

棗さんは、すごく上手かった。

経験はあまりないと言っていたが、高校生でその上手さはもはや全国レベルだ。

そうして、私達の練習に混ざりながら、棗さんは、すごく楽しそうだった。

そんな笑顔を見ていたら、なぜか胸が高鳴る。

夕方になり、棗さんはもう帰ると言った。

私は残念だったが、いつも通りに戻るだけだ。

すると、棗さんはお礼と言って木で出来たキーホルダーをくれた。

自作らしい。

簡単な別れの言葉をかわし、これでさよなら。

いなくなった後に練習を再開する。

なぜか胸が痛んだ。

これで恋に落ちたのなら、私、結構軽いなあ。

そう思いつつ、滑っていると。

ガシヤッ!!

嫌な音を立て、転がっている私。

落ちていた枝に引っ掛かったんだろう。

コースとは外れた、林の中へ転がっていった。

「あいつつ・・・。」

立ち上がろうとした瞬間。

足場が無くなった。

そして、私は落ちていく・・・。

気絶していたのだろう。

辺りはもう真っ暗で、ここがどこだかわからない。

頼りなのは、月明かりだけだ。

立ち上がろうとしたら、足が動かない。

明らかに骨折している。

そう意識してしまった瞬間。痛みが襲ってきた。

意識が薄れる。

（ここで、死んじゃうのかな・・・。）

私の意識は、闇へと落ちていく。

真っ白な部屋にいる。

・・・寒い。

とても冷たい。

意識が徐々に回復して。

やっと理解した。

ここは、部屋なんかじゃない。

凍てつく雪の中に、私は居た。

真ルート第三話『昔話』（後書き）

いかがでしたか？

新キャラは初めてで、なんだかよくまとまりませんでした。
なんとか物語にしていこうと思います。

それでは。

「ちょっと！あたしにもなんか言わせなさ・・・モガモガ。」

・・・それでは！
（精一杯の笑顔→）

リトルバスターズと
このサイト様と
読者様に、

感謝いたします・・・。

第四話『昔話その2』（前書き）

いやくだいぶ遅れてしまいました。

最近忙しいわ風邪ひくわで大変でした。

「大丈夫？ みんなも風邪には気をつけなさいよ。」

それでは本編スタートです！

第四話『昔話その2』

「ねえ、直枝くん。」

「なに？真さん。」

「朱鷺戸さんって何組だか知ってる？」

いきなりの質問に、僕はこう答えた。

「ああ、朱鷺戸さんはこの隣のクラスだよ？」
親切に教えてあげる。

「そう？ありがとう！直枝くん。」

「いえいえ。」

それが。

「沙耶せんぱーい！」

「なっ!?! 美茶子!?! なんでここにいるの!?!」

「直枝くんが教えてくれましたっ!」

「・・・そう。」

「あれ?先輩?顔が怖いですよ?」

「いいから、貴女は帰りなさい!!!!!!」

ドガッ!

「どうゆうこと?な・お・え・く・ん?」

「え?ああ、あれは、下手に隠したらダメだとおもって・・・」

「だからってなんで教えるのよ!『朱鷺戸さんは知ってるけど、クラスまではわからない』とか言ってごまかしなさいよ!」

「でも、沙耶さんは真さんと知り合いなんだね。・・・もしかして、あの子もスパイ?」

「・・・ええ、そうよ。あの子が私を先輩って呼ぶのは、私が先にスパイになったからよ。・・・年は同じだけど。」

「そうなんだ。」

「そう言うこと。だから、相手もスパイ。信用しちゃだめよ。」

「なんで？沙耶さんの知り合いならいいじゃない。」

「・・・はあ。」

「・・・いい？理樹君。スパイってゆうのは、人を騙す職業なの。」

「だから、相手がスパイだと分かっている以上、今も騙されてるかもしれないのよ？」

「パートナーでないかぎり、自分の正体は明かさないの。」

「う、うん。わかった。」

「わかればいいわ。なるべく、あの子との接触は避けること。」

「うん、わかったよ。」

僕はダンジョンを進んでいく。

まさか、あんなに簡単に教えてくれるなんて。

もしかして、直枝理樹って、アホなの？

いやいやまさか、沙耶先輩がアホをパートナーにするわけないし。

実は、罨だったり・・・。

ないか。

本当にアホだ。

「どうしたの？理樹君。」

「いや、なんだか馬鹿にされた気がして。」

「いや、馬鹿ってゆうか。・・・あなたアホよ？」

「いやいや、僕はアホじゃないよ。」

「なんでそう断言できるのよ。」

「だって、証拠がないじゃない。だったら沙耶さんも、なんで僕がアホだって言えるのさ。」

「なんでって、そりゃあ・・・。」

「あなた、なんで今上半身裸なの？」

「それは、沙耶さんが・・・。」

「ちょっと前」

「理樹君って、体細いわね。」

「そんなことないよ！それでも真人と鍛えてるんだから！」

「・・・まあいいわ。先に行きましょう。」

「・・・ってことがあったからだよ。」

「脱ぐ必要ないじゃない。」

「沙耶さん言っただけじゃ信用しないでしょ。」

「・・・はあ。」

（アホだわ・・・）

「まあいいわ、先に行きましょう。」

「ちよっ、待ってよ！」

「早く服着なさいよ。」

暗い洞窟のような場所にいた。

さっきまで凍りそうだった身体は、何の異状もなく、健康そのものだった。

だけど、動けなかった。

何者かに、銃を突き付けられていた。

『お前は何故ここにいる。』

何故？そんなこと知らない。それは私が聞きたいことだ。

『また、イレギュラーか。』

イレギュラー？何それ、私が異状？なんで？

『話をする必要はない。消えろ。』

カチャ

私は、ここで死ぬ。

そう思った。

ドンドン！

銃声が二つ。

「あれ？生きてる？」

『生きたければ走りなさい！』

声が聴こえた。

その声と銃声を背に、

私は全速力で走った。

疲れた。走って、走って、走りまくった。

どれだけ走ったのか覚えていない。

それだけ、無我夢中だった。

『大丈夫？』

またあの声がする。

「おかしいな・・・結構走ったと思ったのに。」

私の意識は、闇に落ちた。

第四話『昔話その2』（後書き）

いかがでしたか？

まあ、こちら辺は繋ぎでしかないので見所はありませんが、ここから盛り上がっていくと思います。

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様に

感謝いたします・・・。

第五話『試験』（前書き）

どうも、お久しぶりです。

前回の更新何ヶ月前だっけ…

すいませんでした…。

「まったく・・・。」

はい。すいません。

「それじゃあ本編、スタート！」

第五話『試験』

「ん．．．。」

意識が戻る。

「んああ、あれ？ここは．．．。」

確か私は洞窟にいたはず。

「気がついた？」

「え？」

「危なかったわね。貴女。」

キョロキョロと辺りを見回す。

「．．．アパートの部屋？」

「違うわよ。ここは学生寮。私はここの学生よ。」

「え？ここのって、ここ学校なんですか？」

「ええ。もっとも、貴女が居たのは学校の地下ね。」
「地下．．．？」

「そう、そしてそこに、財宝がある。」

「えっ！財宝！」

「声、大きいわよ。・・・私はそれを探してるんだけど、あそこは危険よ。」

「危険って。まさかあの人が」

「そう、奴は時風瞬。闇の執行部。部長よ。」

「闇の・・・執行部？」

「うちには執行部っていう委員会があるの。それは、表で通じることしかない。だけど、闇の執行部は裏から手を伸ばしてくる。・・・犠牲になった生徒も何人かいるわ。」

「犠牲になるって、そのあと、どうしたんですか？」

「行方不明よ。」

「そんな・・・。」

「だから、あいつらは危険。貴女も、犠牲になりたくなかったら、あの地下。そして私に二度と近づかないことね。」

「・・・あなたは、一人で立ち向かってるんですか？」

「そうよ？それがどうかした？」

「・・・お願いします。私にも手伝わせて下さい。」

「・・・さっき言ったじゃない。あいつらはー」

「だから、一人より二人のほうが心強いじゃないですか。」

「・・・わかったわ。でも、貴女が私のパートナーになるには、特訓が必要よ。」

「は、はい！」

「私の名前は朱鷺戸沙耶。あなたは？」

「私は、真美茶子です。」

「そう、美茶子。まずは銃の使い方を教えるわ。ついてきなさい。」

正直に言おう。

沙耶先輩の特訓は。

キツイ。

「ハア、ハア。」

「そんなもので終わり！？まだまだこれからよ！」

「うぐっ、ハア、ハア。」

「・・・終わりよ。」

ダンッ

「はあ、やっぱり沙耶先輩にはかないません。」

「当たり前じゃない。でも。強くなったわね。美茶子。これで貴女も私達組織の一員よ。」

「ワイーありがとうございます。」

「・・・なによその返事。」

「だって、沙耶先輩先にパートナー決めちゃうんだもん。」

「それは・・・仕方ない事で。」

「知りません。」

「ごめん。美茶子。」

「じゃあ、ジュースおごって下さい。」

「・・・わかったわよ。」

「やった♪」

そんな毎日が楽しくて。

全てを忘れてる事に気がつかず。

こんな毎日がいつまでも続くといいな。

そう思うようになっていた。

「・・・」

「どうしたの？理樹君。」

僕が手にしているものには、こう書かれていた。

『あなたに伝えたいことがあります。放課後、体育館裏まで来て下さい。』

つまり、これは……。

「ラブレター!?!」

「そう……なのかな?」

「いや!?!これあれでしょ!100%でしょ!放課後よ!?!体育館裏よ!?!人気がないのよ!?!」

「まあまあ、落ち着いて。」

「……で、理樹君は行くのかしら?」

「え?」

「告白されに行くのかどうか聞してるのよ!」

わー、沙耶さん顔真っ赤。

「……一応。」

「……もし可愛い子だったらどうするの。」

「まさか、だって僕にはもう、」

「沙耶さんがいるしね。」

言った途端。

『ボツ』という音と共に、沙耶さんが茹でダコのようにさらに真っ赤になっていた。

「な、なな、な、な！」

「どうどう。」

「なにいつてんのよ、り、リキクンは、だって、だって。」

「だって？」

「私たちそういう関係じゃ・・・！」

「あれ？ パートナーってそういう意味じゃなかったの？」

「う、うえ、おえ、げげごぼおうえつ。」

盛大に吐いた。

（吐いたといっても口で音を言ってるだけだが。）

「沙耶さん。落ち着いて。」

「う、うん。」

「それじゃあ、今日からそういう関係になろう。」

「・・・うん／＼／＼」

「好きだよ。沙耶さん。」

「理樹君。あ、あたしも、、、、すき。」

言われて初めて気づいた。

めちやくちや恥ずかしいし、めちやくちや嬉しい。

こうして、僕と沙耶さんは別の意味でもパートナーになった。

約束の時間。
体育館裏にて。

「君は・・・」

「直枝君、来てくれましたか。それじゃあ、」

「ごめんなさい！」

「・・・・・・・・・・。」

あれ？空気が死んだよ？

「は？」

「え？」

「直枝君。何言ってるの？」

「え？あれ？」

「まさか、私が直枝君に告白すると思ってたの？」

「うん。」

（直枝君・・・自信あるのかな。確かに童顔だけど。）

「そんなわけじゃないじゃない。」

「う・・・なんかゴメン。」

（間違いだったけど、断られたのはちよつとくるわね・・・）

「そんなに沙耶先輩が好き？」

「な、何故君がそれを？」

「それしかないじゃない。」

真さんは、告白しにきたわけじゃないらしい。
ということは。
全部僕の暴走。

（ハズカシッ／＼／＼）

「で、君をここに呼んだわけだけど。」

「テストよ。」

「テスト？」

「君が沙耶先輩に相応しいかどうかのね。」

「え、何を」

ダウン！！

「制限時間は30分。それまでにこのペイントボールが10個あったら。」

「君に沙耶先輩は渡さない。」

僕の背後の壁に赤いペイントボールの赤が垂れていた。

「それじゃ、始めよっか。」

可愛らしい笑顔が、

とても恐ろしかったです。

――直枝理樹 談

30分とゆうと、アニメの放送時間（CM込み）と同じなんだけど。

「ほらほら！まだ10分しか経ってないよ？」

おかしいな。僕の体感時間だともう軽く1時間越えてるよ。

既に5回当たっている。

これでは負けてしまう。

考えろ。

沙耶さんのために。

迷わずに真さんに突っ込む。

「ふうん、考えたね。」

一回当たった。

それでも距離を詰めることはできた。

あとは・・・。

ガシッ！

「え！」

叩きつける！

ドンッドンッ

昔謙吾に教わった。

柔道の固め技。

固めるときに一発くらったけど、まだ7発。

銃を取り上げ、体を固める。

あとは、残りの15分待つだけだ。

「く、くううっ！」

「僕の勝ちだよ、真さん。」

「り、理樹君……」

「やあ、沙耶さん。聞いてよ、b」

「早速浮気か ああああああ！！」

ガスツ

あ、
いけない音。

「ぼげらあっ!!」

吹っ飛ばされた。痛い。

「あ、沙耶先輩。」

「美茶子！何やってるのよあなたたち！！」

「あー、あの、これは・・・てへっ♪」

「りーきーくーん！？」

「怖い！顔が怖いよ沙耶さん！」

あと全身が凄く痛い。

「いきなり浮気して!!」

「浮気？なんのこと？」

「今ここで、美茶子と、抱き合ってたじゃない！」

・・・いくら柔道の技だといっても、遠目には二人で抱き合っているようにしか見えなくて。

「ち、違うよ沙耶さん！これは・・・」

詳しく話した。

「みーさーこー！？」

「それじゃ！またね直枝君、沙耶先輩！」

「待てやゴラ」

ガシッ

「せ、先輩？女の子がそんな恐い顔しちゃ・・・はい。・・・はい。すいませんでした。」

「ごめんね理樹君。誤解して。」

「あはは・・・。」

こうして、僕は真さんのテストに合格した。

「でもやるじゃない、理樹君。柔道なんてどこで覚えたの？」

「昔謙吾から教わって。」

「あら。そうなの。」

「びっくりしましたよ。もう。」

「それはあなたが未熟なだけよ。」

「あはは・・・。」

騒がしい毎日が、続いていく。

まるで、悲しかったことなんてなかったように。

第五話『試験』（後書き）

いかがでしたか？

これからまた出来るだけ更新していきたいと思えます。

真ルートもそろそろ、
終わりそうです。

それでは

リトルバスターズと
このサイト様と
読者様に

感謝いたします・・・。

第六話『闇の中へ』

私はどうしてここにいるんだろう？

初めからここが私の居場所だった？

……………まあいいや。

「なんだ？今日は学食いかねーのか？」

「あ、うん。ちょっと用事があったて…。」

昨日沙耶さんに言われた通り、いつも訓練している空き地へ向かう。

「はい！理樹君！」

「……………え？」

「昨日言ったでしょ。お弁当作ってくるって。」

聞いてない。

何かの特訓かと思ってた

「頑張って作ったのよ？ほら、食べてみてよ。」

「うん。それじゃあいいただきます。」

モグモグ

この、あっさりとした味付け、それでいてご飯のおかずにもなる美味しさ。これは…

「うまい！美味しいよ沙耶さん！」

「そ、そりゃあそうでしょう！昨日の夜から頑張って…はう！」

「ありがとう。沙耶さん。」

「う、うん。」

「ちょっとまったああああ！！！」

「あら美茶子、いたの？」

「ヒドいですよ沙耶先輩！私を呼んでおいて何ですかそれ！？」

「あはは、ごめんごめん。」

「もー、モグモグ…うまっ！沙耶先輩これ美味しいですよ！」

ワイワイと続く昼休み。

それが、崩れる音がした。

「美茶子！後ろ！」

沙耶さんがいきなり叫ぶ。

しかし、遅かった。

「え？何、コレ……………沙耶せんぱい……………！」

真さんの周りに黒い霧のようなものが渦巻いて、

「た……………す……………け……………」

真さんを包んだまま消えてしまった。

「美茶子！」

「真さん！」

「理樹君。行くわよ。」

「行くなって、どこに？」

「時風の所。あの黒い陰は多分時風のものよ。」

「ダンジョンにいきましょう。」

僕は準備を済ませ、ダンジョンへ向かった。

「これまでのようにダンジョンを潜っていたら、美茶子は助けられない。だから、強硬突破よ！」

「えええっ!!！」

沙耶さんはもってきたカバンから機関銃を取り出し、下にむけ。

ドガガガガッ!!!

大きな穴が空いた。

「覚悟はいい？理樹君。」

無言で頷く。

「じゃあ、行くわよ。」

『ゲーム、スタート!』

いま、何階だろうか。

かなり潜った気がする。

「理樹君、やっと居たわよ。」

『…来たか。遅かったじゃないか。』

「質問に答えなさい。美茶子はどこにいる？」

『真美茶子ならあそこだ。』

時風が指を指す。

そこに、透明な筒の中に真さんはいた。

「美茶子…！」

沙耶さんが近づこうとする。

『おっと、ここからは通さない。』

すると時風が沙耶さんの目の前に現れた。

ドン！

「：邪魔よ。どきなさい。」

たしかに、沙耶さんの銃弾は時風に命中した。

しかし、

『通さないと言っただろう?』

時風の身体がブレたと思うと沙耶さんは吹っ飛ばされていた。

「くっ！」

「沙耶さん！大丈夫!？」

「大丈夫よ。このくらい。それより理樹君。マシンガンの用意はいい？」

沙耶さんが時風と話している間、僕は機関銃に銃弾をつめていた。

「うん！いつでもOKだよ！」

「理樹君！撃って！」

「了解！」

ガチッ

ドガガガガッ！

煙が立ち、相手が見えなくなる。

「キャアッ！」

煙で周りが見えない中、沙耶さんの悲鳴が聞こえてきた。

「沙耶さん！？大丈夫！？」

煙が晴れる。

『これで終わりだ。』

「ぐっ、り、理樹…君…！」

「沙耶さん！？」

沙耶さんは時風に捕まり、首を絞められていた。

「まってて沙耶さん！今助けるから！」

『邪魔だ。大人しくしていろ。』

ピン！

動こうとした。

でも、動けない。

なぜ僕は倒れているのだろう。

「り……き……くん………。」

沙耶さんがもがいている。

僕がもしヒーローだとしたら、カッコ良く、敵を倒して、みんな助けて、それなのに、僕は無力だ。

自分の大切な人を守ることすらできないなんて。そんなヒーロー、誰が助けを求めるんだろう。

………助けるんだよ。

沙耶さんが泣いている。

それだけで僕は動けるはずだろう？

だって、僕は沙耶さんの、

ヒーローなんだから。

「助けるんだよ!!」

体が動く。

そして、走り出していた。

沙耶さんを苦しめている、その元凶に向かって。

そして、右の拳を思い切り振りかぶり、

「うあああああああ!!」

時風に思い切りぶつけた。

時風は吹っ飛んだ。

同時に沙耶さんを助ける。

「ゲホゲホッ……理樹君、ありがとう……」

「沙耶さん、しっかり。これから、真さんも助けるよ。」

『はたしてそんなことができるかな?』

僕はハッとした。

時風は、ただ立っている。

なにかがおかしい。

…沙耶さんがいない。

さっきまでここにいたはずの沙耶さんが。

いない。

『お前の相方はあそこだ。』

僕は見る。

真さんの隣に、沙耶さんがいた。

「沙耶さん！」

じゃあさっきまでの出来事は一体何なんだ？

すべて、幻だったのか？

足下がぐらつく。

あの感覚。

……ナルコレプシー。

薄れていく意識の中で、時風は言っていた。

『この二人はイレギュラーだ。この世界の住人ではない。』

『異常者は排除するしかない。』

『次目覚めたらいつもの生活が始まるだろう。』

『だから、せめて次起きるまでは、幸せな夢を。』

『おやすみ。理樹。』

僕は落ちて行った。

……

……

……

第六話『闇の中へ』（後書き）

いかがでしたか？

これで真ルートはクライマックスへ、そして沙耶の運命は？

「……………てゆうか、美茶子空気すぎない？」

あれ？確かにこれ真ルート…ですよね？

リトルバスターズと

このサイト様と

読者様に

感謝いたします…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9602u/>

リトルバスターズ after another story

2012年1月9日22時45分発行